大阪大谷大学歴史文化研究第18号 94-118頁 2018年3月

ブルゴーニュ公妃マーガレット・オブ・ヨークの祈禱者像

今井澄子

はじめに

一五世紀にアルプス北方で栄えた初期フランドル（ネーデルラント）絵画は、その作品の質の高さと革新的な表現によって、当時のイタリア・ルネサンス美術とならぶ重要性を担った。フランドルの画家たちが開拓した新しい表現のなかでも、とくに聖なる人物に祈る「祈禱者像」は興味深いモティーフである(1)。本来は、宗教画において聖なる対象に従属する付随的な存在として表わされるはずなのに、初期フランドル絵画に描かれた祈禱者像は、祈禱対象と同じ大きさで空間を共有するようになったばかりか、あたかも対等な存在であるかのごとく、祈禱対象と画面を二分する位置を占めることすらあったからである。

では、初期フランドル絵画の革新的な祈禱者像の源泉はどこに求められるのだろうか。その重要な一角としては、当時フランドルの地を支配した三代目ブルゴーニュ公フィリップ善良公（在位一四一九～六七年）や四代目のシャルル突進公（在位一四六七～七七年）の祈禱者像が挙げられる(2)。彼らは、支配者としてフランドルの画家や注文主に直接的・間接的に影響を与え続け、祈禱者像の「モデル」を提供することとなった。このような影響関係は、ブルゴーニュ公国の他の支配者の祈禱者像にも認められるであろうことが想定される。

そこで本稿では、イングランド王女からシャルル突進公の三番目の妻となったマーガレット・オブ・ヨーク（一四四六～一五〇三年）の祈禱者像に注目したい。マーガレットは、多くの写本注文に関わり、その挿絵に自身の肖像や祈禱者像のイメージを残した(3)。ブルゴーニュ公妃のなかでは、特徴的な肖像イメージを発達させた最初の人物であるとも位置付けられており(4)、ブルゴーニュ宮廷の影響下で栄えた初期フランドル絵画の祈禱者像を分析する際には欠かせない人物であると言える。

以下ではまず、マーガレット・オブ・ヨークの生涯を概観し、マーガレットの祈禱者像の特徴を分析する。つぎに、マーガレットの祈禱者像の「モデル」となった表現を探究する。そして、マーガレットの祈禱者像から影響を受けたと考えられる同時代のフランドル絵画を検討し、当時どのような祈禱者像が望ましいと考えられていたのかという点についての理解を深めたい。

一、マーガレット・オブ・ヨークの生涯

マーガレット・オブ・ヨーク（図1）は、一四四六年にイングランドのヨーク家に生まれた[5]。兄弟には、後にイングランド王となったエドワード四世（在位一四六一～七〇、七一～八三年）と、リチャード三世（在位一四八三～八五年）がいる。マーガレットは二二歳になるまでイングランド中部のノーサンプトンシャーで過ごし、四代目ブルゴーニュ公シャルル（図2）との結婚を機に、ブルゴーニュ公国領内へと移り住んだ。

シャルルとマーガレットの結婚式は、一四六八年にブリュージュでとり行われ、その祝宴は、公国内外から招待された九千人以上の人々を驚嘆させる豪華盛大なものとなった[6]。後年、ブルゴーニュ公国の年代記作者ジョルジュ・シャトランが、この「婚礼の盛大さ」をシャルル突進公の偉業のひとつに数え挙げたことからも、式のインパクトの大きさがうかがえる[7]。年代記作者ジャン・ド・エナンも、同様に式の華やかさを報告しながら、新婦マーガレットを「とても美しく、優雅だった」と称え[8]、彼女が「アーミン毛皮の裏地のついた金襴織」の服装をしていたと伝えている[9]。

マーガレットは兄のエドワード四世と同じように、背が高く、細身で、卵形の顔にダーク・グレーの瞳を持っていたとも伝えられる[10]。その特徴は、今日最もよく知られるマーガレットの肖像画（図1）にもうかがえるだろう[11]。この板絵は、結婚の際にシャルルの肖像の対として制作されたとも推定される祈禱者像であり、二〇×一二センチメートルの小型の画面に丁寧に描き込まれたその姿は、ド・エナンの述べる「優雅」さも醸し出している。この作品でマーガレットは、頭部に黒いベルベットの布をかけ、束ねた髪の上にダーク・グレーのエナン帽をかぶり、その上に白いヴェールを垂らしている。黒い布には、ブルゴーニュ公国の頭文字Bをあしらった宝石のブローチが飾られる。また、首には、ヨーク家の薔薇や、シャルルのCとマーガレットのMからなるモノグラムをモティーフにしたネックレスをつけている。

さて、シャルルとマーガレットの結婚式が盛大に行われたのは、シャルル突進公がマーガレットとの縁組みを通して、偉大なる先代フィリップを継いでブルゴーニュ公となったシャルル自身の権威を示し、ブルゴーニュ公国の立場を強化したいと願ったからに他ならない。そのためにも、後継者の誕生が望まれたことは想像に難くないが、シャルルとマーガレットが共に過ごした時間はごくわずかであり、その望みが叶うことはなかった。二人の結婚期間は一〇年に満たない短さであったうえ、シャルルは戦争のため不在がちであった。結婚直後の六ヶ月の間ですら、二人が一緒に過ごしたのはたった二一日であり、一四七三年と七四年には、各々わずか一〇日から一五日間しか一緒にいなかったと推定される[12]。二人が最後に会ったのは一四七五年七月のことであり、エドワード四世を迎えるために都市サントメールに数日間滞在したと記録される。そして、シャルルは一四七六年一月に、ナンシーの戦いで亡くなっている。マーガレットは、約四半世紀後の一五〇三年にメッヘレンで没しているので、結婚から約九年弱（八年半）を公妃として過ごし、その後の二六年間は未亡人という立場にあったということが分かる。

シャルルの在命中も没後も、マーガレットが政治の表舞台に立つ機会は限られており、たとえば一四七五～七七年の間に、シャルルの代理をつとめたくらいであった[13]。他方で、マーガレットは、新婚時代から、シャ

ルルと前妻イザベル・ド・ブルボン（一四三六～六五年）の子であったマリ・ド・ブルゴーニュ（一四五七～八二年）と暮らし、マリの世話や教育にあたった。一〇歳ほどの年齢差しかなかった両者は多くの時を共有し、親密になったと考えられる。それゆえ、マリが一四八二年に落馬事故によって亡くなったことは、マーガレットの公私両面にわたって大きなショックを与えたことだろう。マーガレットは、遺されたマリの子フィリップ（一四七八～一五〇六年）やマルグリット（・ドートリッシュ、一四八〇～一五三〇年）の教育に力を注いだ。彼女がこのようにブルゴーニュ公の子女たちを熱心に教育したのは、彼らに愛情を感じていたことはもちろんだが、ブルゴーニュ公妃という自身の立場に自覚と誇りを持ち、公国の繁栄のために貢献しようとつとめていたからではないだろうか。

二、マーガレットの写本収集と祈禱者像

マーガレットが自身の立場と役割に自覚的であったことは、彼女が芸術保護に関わる活動に活発に携わっていたことにもうかがえる。マーガレットは結婚後、早々にバンシュ城、モンスの邸宅、そしてメッヘレンの宮殿などを改装・再建しながら、モンスの教会に祭壇前飾りを寄贈したり、ブリュージュやヘントの教会にステンドグラスを贈るなど、ブルゴーニュ公国領内各地の宗教施設に多くの寄進を行った[14]。

さらにマーガレットは、一五世紀の女性としては例外的に多くの写本を収集したことでも知られる[15]。この点についてはすでに多くの考察がなされてきたが、一九九二年に出版されたマーガレット・オブ・ヨークをテーマとするシンポジウム報告書では、マーガレットが関与したと推定される約三〇冊の写本がリスト・アップされた[16]。それらの写本のうち、本稿の〈表〉に挙げたリスト番号23までが、マーガレットが実際に所有したとみなされる写本である[17]。また、このリストからは、マーガレットによる注文が、ほぼ、ブルゴーニュ公妃時代の一四六八年から七七年の間にあること、さらに範囲を絞ると、後半の七五～七七年の間に集中していることが分かる[18]。

表の右から二番目の項目の〈マーガレット・オブ・ヨークの「サイン（しるし）」〉に挙げた紋章などのモティーフは、調査不可能なものを除くと、ほぼすべての写本に認められる。網掛けした箇所は筆者が付け加えた「サイン」であり、このなかにはマーガレットの肖像や祈禱者像のイメージが八ページ分、含まれている。

では、これらの写本挿絵において、マーガレットはどのように表わされているのだろうか。以下では、祈禱者像と献呈像を含む肖像表現について、リストの順番に沿って検討していきたい。

リスト番号1番の写本は、マーガレットが結婚後まもなく、彼女の聴罪司祭をつとめたニコラ・フィネに依頼した慈悲についての書である（図3）[19]。最初のページの挿絵で、マーガレットは七つの慈悲を実践する者として登場する。上段の左から右に、貧者へのパンの施し、喉の乾いた巡礼者への水の施し、裸の男性への服の恵み、巡礼者への宿の提供、下段左から右に、囚人への演説、病人の訪問、死者の埋葬が表わされる。マーガレットは七点目の埋葬場面には登場しないが、そのすぐ右側の挿絵で、聖女マーガレットのとりなしを受けつつ祈禱台に跪いている。これによって、七つの慈善行為とマーガレットの瞑想や祈りとの関係が示唆される。八つの場面は金色の線で区切られ、上段と下段の交差部には、シャルル突進公

とマーガレットのイニシャルをあわせたCMのモノグラムや、菱形の枠の左側にシャルルの紋章要素を組み込んだマーガレットの紋章も示されている。マーガレットの紋章要素は、彼女が跪く祈禱台にも見いだされる。

祈るマーガレットの姿は、同じ写本の別ページにも描かれている。その挿絵でマーガレットは、ブリュッセルの聖グデュル聖堂（後景中央）や、サブロン聖堂（左奥）を背景に、四人の教父たちに囲まれ、聖女マーガレットにとりなされ跪いている（図4）。祈禱台と文字部分のイニシャルや、欄外装飾の植木鉢（図5）には、紋章も表わされている。植木鉢にはさらに、マーガレットのモットー「Bien en aviengne（全て上手くいくように）」も記されている。

リスト2番は、1番と同じくニコラ・フィネによって献呈された写本であり[20]、マーガレットは、写本の最初のページで復活のキリストを目撃している（図6）。マーガレットの身振りは、ノリ・メ・タンゲレ（我に触れるな、『ヨハネによる福音書』第二〇章一七節）のマグダラのマリアを思わせるものである。ベッド上部の青い天蓋にはCMのイニシャルが記され、挿絵の左外側では、軽やかに浮かぶ天使が紋章を手にしている。そして、下部にある植木鉢にも、CMのイニシャルとマーガレットのモットーが表わされる。この鉢に植えられた植物は、彼女と同じ名を持つマーガレット（デイジー）のようである。マーガレットの紋章要素は、続くページにおいても、華麗に飾られた冒頭文字（historical initial）のなかに示されている。

このように、リスト1、2番の写本においては、さまざまな方法によってマーガレットのしるしが示されている。とくに興味深いのは、マーガレットが、ほぼ画一的とも言える姿を見せているという点である。どの場面でも、マーガレットは向かって左側を向き、高さのあるダーク・グレーのエナン帽に白いヴェールをつけ、アーミンのような毛皮で縁取りされた金（あるいは黄色系）の布地に植物模様をあしらった服をまとっているのである。

もちろん、この二冊が同じ献呈者による対作品であることを考慮すると、マーガレットの描写が似ていても不思議ではないかしれない。ところが、興味深いことに、マーガレットは他の写本挿絵においても、服の色などを変えつつ同じような姿で表わされているのである。

リスト7番では、マーガレットはグレーのエナンに毛皮の縁取りと透かし模様のある薄黄色の服を身につけ、翻訳家ダヴィッド・オベールから、古代ローマの哲学者ボエティウスの書『哲学の慰め』の翻訳書を献呈されている（図7）[21]。オベールは、一四七七年までに少なくとも六点の装飾写本を彼女に贈っていることから、マーガレットお気に入りの献呈者であったことがうかがえる[22]。この挿絵の欄外では、マーガレットと思われる花々や花に絡みつく巻物が、挿絵の優美さを強調している。

同様にオベールによって作成されたリスト8番の写本では、マーガレットは教会のような建物にもうけられた天幕のなかで、聖画像を前に手を合わせ、祈禱書に目を落としている（図8）[23]。後方には彼女に付き従う二人の女性も跪く。侍女たちがマーガレットよりも簡素な服装をしているのは、先に挙げた献呈図（図7）にも見られる表現である。リスト21番では、マーガレットは一人で跪くが、やはり細長いエナン帽や毛皮の縁取りのある服を身につけ、祭壇上の聖三位一体を見つめている（図9）[24]。

リスト27番では、マーガレットは、夫シャルルとともにヴィジョンをみる聖女コレットの後ろで跪いている（図10）[25]。リスト21番の描写と同じ

く、毛皮の縁取りのあるグレーの服を緑色のベルトで締めている。この書をヘントの修道院に寄贈したのはマーガレットであるため、彼女が注文に関与したことは明らかだが、挿絵に表わされたその髪型や帽子、そして顔立ちは、これまでのマーガレットの描写とは少々異なるように思われる(26)。その差異には、作者の問題と、この挿絵が聖コレットを主役とするという点が影響しているだろう。

最後に、リスト28番の写本挿絵では、マーガレットはマリ・ド・ブルゴーニュとともに聖アンナを主題とする祭壇画の前に跪いている（図11）(27)。この写本はヘントの聖アンナのギルド（信心会）のために作られたもので、マーガレットは一四七三年、マリは一四七六年にはこの団体のメンバーとなった(28)。写本が傷んでいることもあり、どちらの顔立ちも明確には捉えられない。そのうえ、エナンをかぶる二人の装いは類似しており、服地の色の違いくらいしか見られない。それでも、向かって左がマーガレット、右がマリであることは、祈禱台を飾る布地と祭壇の上方に掲げられた紋章、そして左側に咲き誇るマーガレットの花とそこに絡みつくモットーの巻物から明らかである。下部には、同団体の一員と推定される男性たちも跪いている。

以上に概観したように、写本挿絵に描かれたマーガレットのイメージは、グレー系のエナンに毛皮の縁取りのあるドレスという装いで、紋章やモットー、あるいはマーガレットの花などのモティーフを伴うという共通点を持つ。他方で、マーガレットの顔立ちに関しては表現に幅があり、「卵形の輪郭」と伝えられる容貌と一致するのかどうか疑わしい場合もある。それは、挿絵家の様式や技量はもちろん、挿絵家がマーガレット本人（または彼女の肖像）を前にして描くことができたかどうかという条件によっても左右される問題だろう。

そのような問題は、後に描かれた板絵の《キリストの奇蹟の祭壇画》にもうかがえる（図12）(29)。マーガレットは、左翼パネルで歴代のブルゴーニュ公たちとともにカナの婚礼の祝宴についているが、その顔の輪郭は、他のマーガレットのイメージよりも丸みを帯びている。それでもこの女性がマーガレットであると同定されるのは、フィリップ善良公とシャルル突進公の間に座すという席次や、他のマーガレットのイメージと共通する帽子や服装をしているためである。

このように、一五世紀においては、人物の容貌を正確に描き出すことが困難な場合も少なくなかったと考えられる。その際は、描かれた人物が本人であることを確実に伝えることのできる表現コードが求められたことだろう。それは、本稿で挙げた写本挿絵の随所にマーガレットの「サイン」が散りばめられていることの理由にもなる。それらの「サイン」は、マーガレットの当該写本への関与だけでなく、描かれた人物がマーガレットその人であることを保証するという点でも重要なモティーフであったと言えるだろう(30)。

三、マーガレットの祈禱者像の「モデル」

マーガレットのイメージに見いだされるような表現のコードは、マーガレットを描くにあたって初めて登場したわけではない。それは、マーガレット以前には、三代目ブルゴーニュ公フィリップのイメージに対して顕著に用いられた(31)。

フィリップは、先代のブルゴーニュ公ジャン無怖公（在位一四〇四～一

九年）が暗殺されて以降、喪の意味を込めて常に黒服を身につけたと伝えられるが[32]、板絵や写本挿絵に見られるフィリップもまた、ほとんどの場合において黒服をまとい、その上に、彼が創設した金羊毛騎士団の勲章（頸章）を身につけている（図12〜図15）。着帽している時も脱帽している時もあるが、その服飾と顔立ちはかなり一定している。このように定型を繰り返すフィリップ善良公の姿は、マーガレットのイメージの「モデル」となったのではないだろうか。

マーガレットがブルゴーニュ公妃となった時には、フィリップは既に世を去っていたが、その肖像・祈禱者像は数多く残されていた。マーガレットが各地に流布していたフィリップの彫刻や板絵を目にしたであろうことはもちろんだが、ブルゴーニュ公の写本コレクションに身内としてアクセスすることができたと考えられる点[33]も、マーガレットがフィリップのイメージを手本としたことの大きな理由として挙げられる。

ブルゴーニュ公の所蔵コレクションは、フィリップ善良公の時代に一段と豪華になったことで知られる。所蔵書のなかには、ダヴィッド・オベールなどのように、元々はフィリップに写本を献呈し、後にマーガレットのために制作した翻訳家や工房が関与した写本も含まれた（図15）[34]。このような環境に鑑みるに、フィリップ善良公にならってマーガレットのイメージが表わされたのはごく自然なことであったように思われる。

また、同様に重要な要因として、フィリップの肖像や祈禱者像が自らを巧みに称揚し、支配者としての威厳を的確に示すことができていたという点を挙げたい。写本挿絵におけるフィリップ善良公のイメージは、彼が献呈を受ける場面に最も多くあらわれる（図14、図15）。これらの挿絵では、フィリップは堂々とした様子で天幕の下に立ったり、玉座に座ったりしている。周囲には、フィリップの紋章と金羊毛勲章を組みあわせたモティーフや、モットーの「Autre n'auray（他は持たぬ）」も示される。

同じような表現は、フィリップの祈禱者像にもうかがうことができる（図16）。受胎告知論を著した書の冒頭挿絵では、フィリップは、いつもの黒い服を身につけ、紋章要素で飾られた祈禱台に跪く。カラフルな天幕の頭上には、聖アンドレの十字架などの公のエンブレムの要素も示されている。同様の描写は、別の写本挿絵にも見いだすことができる（『フィリップ善良公の聖務日課書』ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9511, fol. 398. など）。

このように、フィリップ善良公のイメージは、誰が見てもフィリップその人であると分かるような服装を基本に、天幕、紋章、金羊毛勲章などのモティーフを組み合わせることによって、公のステイタスと支配者としての立場を強調した。ブルゴーニュ公の写本は、たとえ祈禱書であっても完全に私的に使用されたわけではなかったと考えられるので、その祈禱者像に、公としての権威を誇示するという意図が含まれていても不思議ではない。そして、そのために確立された表現方法こそが、マーガレットの祈禱者像に取り入れられていったのである。

以下ではさらに、マーガレットがブルゴーニュ公フィリップのイメージを「モデル」とした理由を、写本の注文・制作時期という観点から考察したい。

前述したように、マーガレットが写本制作を依頼したのは、ほぼブルゴーニュ公妃時代に限られるうえ、多くが一四七五年〜七七年頃であったと推定される。それが、シャルルの亡くなる直前の数年間と重なるという点はきわめて示唆的である。その重複はまず、二人が結婚してから七年以上の

時が経ったことを意味している。マーガレットは既に、熱望された嫡出子の誕生が難しいことを悟っていただろう。くわえて、この時期は、戦況が悪化の一途をたどっていた。マーガレットは、シャルルの帰還を信じつつも、もしもの時の覚悟を決め、自身の立場のみならず、公国をも守ろうとする意識を高めていたかもしれない。

マーガレットの意識の高さは、写本挿絵におけるフィリップ善良公のイメージの大半が献呈像として表わされたのに対して(35)、マーガレットの場合は祈禱者像の方が多いという点にも示唆される。ここから、彼女が宗教活動に自身の役割や使命を見いだしていた可能性をうかがうこともできるだろう。

マーガレットの自覚と危機意識については、同じ立場にあったマーガレット以前のブルゴーニュ公妃たちの祈禱者像と比較することで、より一層明確になる。そもそも、マーガレット以前に公妃の祈禱者像が表わされることは少なかったが、描かれる場合は、ブルゴーニュ公の注文作品において、公とともに表わされた（図17）。フィリップ善良公の三番目の妻イザベル・ド・ポルテュガル（一三九七～一四七一年）は、彼女自身の肖像画（図18）と似た装いで描かれるものの、右隣に控える女性とあまり区別されておらず、没個性的であることが指摘されている(36)。また、ここには、ブルゴーニュ公妃としての権威を示すようなモティーフは見いだされない。

シャルルの二番目の妻のイザベル・ド・ブルボンに関しては、ウェラ・イコンの下でシャルルとともに跪く姿が残されている（図19）。この女性がイザベルであることは、下部に描かれた紋章により特定できるが、彼女の服飾はむしろマーガレットを思い起こさせるという曖昧さも含む(37)。

このように、歴代のブルゴーニュ公妃たちは、ブルゴーニュ公の妻として、やや没個性的な様子で示された。それに対して、マーガレットはほぼ単独で自立した存在として表わされる傾向が顕著であり、自身を慈悲行為の実行者に仕立てるなど（図3）、オリジナルな表現も含まれる。それゆえ、マーガレットは、フィリップのイメージを参照しつつ、自身の表象を自覚的に構築していったとみなすことができるだろう。

四、マーガレットと初期フランドル絵画の祈禱者

マーガレットが、ブルゴーニュ公妃として影響力を持ちたいと願い、自身のイメージを自覚的に作りあげていたならば、その意図はある程度、十分に達成されていたと考えられる。それは、マーガレット本人以外にも、類似した容貌と身なり、そして佇まいを持つ女性の描写が残されていることにうかがえる。本稿では、その例として、初期フランドル絵画の祈禱者像を二例挙げる。

一例目は、《ダンの三連画》に描かれた女性エリザベス・ヘイスティングズの姿である（図20、図21）(38)。これは、初期フランドルの画家ハンス・メムリンク（一四三〇／四〇年頃～九四年）が、イングランド人ジョン・ダンの注文を受け、一四七〇年代末から八〇年代初頭に制作した絵画である。エリザベスは、ダン夫人として、画面の右側で聖バルバラにとりなされ、聖母子に向かって祈っている。後方の柱頭には、ダンとダン夫人の紋章も掲げられている。彼女が身につけるエナンと、アーミン毛皮で縁取りされた紫のベルベットのドレスは、ブルゴーニュ宮廷の流行を反映しているというだけでなく、マーガレットが身につけた服装そのもののようにも思われる（図21～図23）。

ダン夫人が示しているのは、マーガレット風の服飾ばかりではない。興味深いことに、祈禱書を手にし、左斜め側を捉えられた彼女の容貌と佇まいは、マーガレットの姿ときわめてよく似ている。ダン夫人の唇や鼻筋などは、下絵から僅かに強調されるなどの修整がなされているため、本人の個性が加味されているのは確かである（図24）。

実のところ、ダン夫人には、マーガレットを「モデル」とする特別な理由があった。夫妻は、マーガレットがシャルルと結婚する前からイングランド王室に仕えており、夫のジョンは、一四六八年のブルゴーニュ公夫妻の結婚式に、マーガレット側の招待客として出席している[39]。ダン夫妻が身につけている金色の薔薇と太陽、そしてライオンをモティーフにした頸章は、二人がイングランド王エドワード四世と親しい家臣であったことをたしかに示している。

ジョン・ダンはマーガレットがブルゴーニュ公妃となった後も、エドワード四世の側近として、イングランドやフランドルでマーガレットと接触する機会を持った。彼らが良好な関係を保っていたことは、リスト24番にあたる写本が、マーガレットの手を通ってダンに贈られたことからもうかがえる。この写本の最終ページには、マーガレットによると推定される筆跡で「あなたの真の友マーガレット・オブ・ヨークをお忘れなきよう」と記されている（図25）[40]。敢えて英語が用いられている点に、同郷人ダンに対するマーガレットの親愛が示されているように思われる。

ところで、ダンは当時、エドワード四世に仕えつつも大陸側の都市カレーにオフィスを持っていたので、比較的容易にブリュージュを訪れ、画家メムリンクに作品を注文したり、肖像を描いてもらったりする機会を得ることができたと考えられる[41]。それに対して、夫人のエリザベスは、メムリンク工房を何度も訪れることができるような状況ではなかったと推察される。そこで、彼らは、イングランド出身のマーガレットへの敬愛も込めて、マーガレットを「モデル」としたダン夫人の姿を描いてもらったのではないだろうか。

驚くべきことに、ダン夫人をとりなす聖バルバラの姿もまた、ダン夫人とよく似ている。それはとりもなおさず、マーガレットとの類似も意味することになる。マーガレットは、一四七二年以降に、ヘントにおける聖バルバラのギルド（信心会）のメンバーになったので、そこからマーガレットと聖バルバラとを重ねる態度が形成されたとみなすことができるだろう[42]。また、ここに描かれた聖バルバラの装いがマーガレットの典型と少々異なるのは、メムリンクが《聖ヨハネの祭壇画》（ブリュージュ、メムリンク美術館）や《聖カタリナの神秘の結婚》（ニューヨーク、メトロポリタン美術館）などにおいて用いた聖バルバラの型を再び利用しているためと考えられる。このように、マーガレットが初期フランドル絵画の他の注文主のみならず、聖女とも類似しているという点からは、彼女の姿が女性祈禱者の理想を体現していたという可能性が示唆されるように思われる。

二例目は、イタリア人で、ブリュージュでメディチ家の代理人をつとめたトンマーゾ・ポルティナーリ夫人のマリア・バロンチェッリの描写である（図26、図27）。ハンス・メムリンクの手による《受難伝》（トリノ、市立美術館）[43]や、同時期に制作された小型の板絵（図28）[44]でも、マリアは夫と対となる形式で描かれるが、彼女の帽子やアクセサリーは、やはりマーガレットの肖像を思わせる（図29）。そして、一四七〇年代中頃以降に制作された《ポルティナーリの三連画》においては[45]、右翼で跪拝

するマリアは服飾という点で、マーガレットとの類似性を強めている。すなわち、彼女がかぶるエナン帽には真珠が縫い付けられ、夫婦の頭文字TとMのモノグラムがシャルル夫妻のCMのように表わされているのである（図27）。

ポルティナーリ夫人のマリアは、イングランドのダン夫人ほどにはマーガレットを手本とする必然性はなかったように思われる。しかしそれでも、マリアがマーガレットの表現を踏襲しているという点はきわめて興味深い。それは、当時、マーガレットの姿が女性祈禱者としての一定の格を表わし、理想の類型となっていたことのもうひとつの証左となるのではないだろうか。

結びにかえて――理想の祈禱者としてのマーガレット・オブ・ヨーク

本稿の検討からは、イングランド王女からブルゴーニュ公シャルルの妻となったマーガレット・オブ・ヨークが、ブルゴーニュ公妃として多くの写本注文に関わり、豊かな肖像・祈禱者像イメージを残したことがうかがえた。マーガレットのイメージの「モデル」は、先代のブルゴーニュ公フィリップの祈禱者像に求められるが、それは、マーガレットがブルゴーニュ公の所蔵本を目にできる環境にあったというためだけではなく、フィリップ善良公の祈禱者像が、確立された自己イメージを提示しつつ、ステイタスを強調することにも長けていたからである。さらに、マーガレットが写本を注文し入手した期間の多くが、宮廷のなかで自身の立ち位置を確保し、影響力を発揮しようと自覚を強めた時期と重なることもうかがえた。そして、初期フランドル絵画に描かれた女性祈禱者の描写からは、マーガレットの祈禱者像が、理想の類型として画家や注文主たちに共有され、普及していた様子を垣間見ることができた。マーガレットの祈禱者像のさらなる波及については、稿を改めて論じることとしたい。

註

（1）今井澄子『聖母子への祈り - 初期フランドル絵画の祈禱者像 -』国書刊行会、二〇一五年。

（2）今井澄子「信心のモデル、自己称揚のモデル - ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈祷者像と初期フランドル絵画 -」『大阪大谷大学紀要』第四八号、二〇一四年、一～二一頁。

（3）マーガレット・オブ・ヨークの祈禱者像については以下に詳しい。Wim Blockmans, "The Devotion of a Lonely Duchess," in Thomas Kren, ed., *Margaret of York, Simon Marmion, and the Visions of Tondal*, Malibu, 1992, pp. 29-46; Jeffrey Chipps Smith, "Margaret of York and the Burgundian Portrait Tradition," in Kren, *op.cit.*, pp. 47-56; Maurice Smeyers, *Flemish Miniatures from the 8th to the mid- 16th Century*, Turnhout, 1999, pp. 374-391.

（4）Smith, *op.cit.*, p. 47.

（5）マーガレット・オブ・ヨークの生涯については以下を参照。Christine Weightman, *Margaret of York, Duchess of Burgundy 1446-1503*, New York, 1989; Blockmans, *Ibid*; Dagmar Eichberger, ed., *Women of Distinction: Margaret of York, Margaret of Austria*, Turnhout, 2005. なお、マーガレットは結婚後に「マルグリット・ド・ブルゴーニュ」と呼ばれるようにもなるが、本稿では「マーガレット・オブ・ヨーク」に統一している。

(6) シャルルとマーガレットの結婚式についてはとくに以下を参照。Richard Vaughan, *Charles the Bold: The Last Valois Duke of Burgundy*, London, 2002[1973], pp. 41-53; Weightman, *op.cit.*, pp. 30-60; 今井澄子「《エスチルのタペストリー》の政治的役割 - ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの結婚式（一四六八年）におけるイメージ戦略をめぐって -」『大阪大谷大学 歴史文化研究』第一五号、二〇一五年、一～二七頁。

(7) 「…第三は、婚礼の盛大さである。〔第一の偉業が行われた〕同じ都市ブリュージュで豪奢な馬上槍試合が催された。祝宴の間には、きわめて華美ですばらしいものの数々が示された。」"La troisième: La solennité de ses nopces, en la mesme ville de Bruges, les riches et somptueuses joustes qui s'y firent, et les diverses excessives coustanges et pompes monstrées en la salle durant la feste." Georges Chastellain, M.K. de Lettenhove, éd., *Œuvres de Georges Chastellain*, Bruxelles, 1863-66, V, p. 505.

(8) "Elle estoit très-belle dame et de moult bonnes grâces." Jean de Haynin, R. Chalon, éd., *Les mémoires de Messire Jean, seigneur de Haynin et de Louvegnies, chevalier, 1465-1477*, Mons, 1842, p. 106.

(9) 「結婚式の日曜に、新婦が窓辺に来た。彼女は赤金織の織物にアーミン毛皮の裏地がついた服をまとっており、まだ冠をつけたままであった…。」"Ce dimenche, jour des nopces, la dame des nopces vint à la fenestre, vestue d'une robbe de drap d'or cramoisy fourré d'ermines, estant encores en coronne..." De Haynin, *op.cit.*, p. 116.

(10) Weightman, *op.cit.*, p. 51.

(11) この板絵については以下を参照。Eichberger, *op.cit.*, p. 68.

(12) Vaughan, *op.cit.*, pp. 158-159; Weightman, *op.cit.*, p. 72; Blockmans, *op.cit.*, p. 30.

(13) Blockmans, *op.cit.*, pp. 30-33.

(14) Blockmans, *op.cit.*, pp. 33-39.

(15) マーガレットの写本収集については以下を参照。Muriel J. Hughes, "The Library of Margaret of York, Duchess of Burgundy," *The Private Library*, 7, 1984, pp. 53-78; Albert Delorez, "A Renaissance Manuscript in the Hands of Margaret of York," in Kren, *op.cit.*, pp. 99-102; Smeyers, *op.cit.*, pp. 374-391; Thomas Kren & Scot Mckendrick, *Illuminating the Renaissance: The Triumph of Flemish Manuscript Painting in Europe*, exh.cat., Los Angeles/ London, 2003; Anne-Marie Legaré, "La librairye de Madame, Two Princesses and their Libraries," in Eichberger, *op.cit.*, pp. 207-219; Hanno Wijsman, *Luxury Bound: Illustrated Manuscript Production and Noble and Princely Book Ownership in the Burgundian Netherlands (1400-1550)*, Turnhout, 2010.

(16) Kren, *op.cit.*, 1992, pp. 257-263.

(17) Kren, *op.cit.*, 1992, pp. 257-263; Wijsman, *op.cit.*, p. 192.

(18) Wijsman, *op.cit.*, pp. 192, 197.

(19) Hughes, *op.cit.*, no. 12; Smith, *op.cit.*, pp. 49-50; Eichberger, *op.cit.*, pp. 70-71.

(20) Hughes, *op.cit.*, no. 13; Smith, *op.cit.*, pp. 50-51; Smeyers, *op.cit.*, p. 376.

(21) Hughes, *op.cit.*, no. 11; Smith, *op.cit.*, p. 53; Smeyers, *op.cit.*, p. 385.

(22) ダヴィッド・オベールについては以下を参照。Danielle Quéruel, *Les manuscrits de David Aubert*, Paris, 1999; Kren & Mckendrick, *Ibid.*

(23) Hughes, *op.cit.*, no. 20; Smith, *op.cit.*, p. 51; Smeyers, *op.cit.*, pp. 384-385.

(24) Hughes, *op.cit.*, no. 19; Smith, *op.cit.*, p. 52; Smeyers, *op.cit.*, p. 376.

(25) Hughes, *op.cit.*, no. 21; Blockmans, *op.cit.*, p. 37; Smith, *op.cit.*, p. 50;

Smeyers, *op.cit.*, pp. 380-382.

(26) この描写にマーガレットの個性が見いだされることもある。Smith, *op.cit.*, p. 50.

(27) 祭壇画には「ヨアキムとアンナへの受胎告知」が表わされている。Smith, *op.cit.*, pp. 53-54; Smeyers, *op.cit.*, pp. 385-387; Eichberger, *op.cit.*, pp. 70-71.

(28) Blockmans, *op.cit.*, pp. 38-39.

(29) 《キリストの奇蹟の祭壇画》については以下を参照。Yoko Hiraoka, "Le *Triptyque des Miracles* de Melbourne: signification et datation du volet des Noces de Cana," dans *Annales d'histoire de l'art et d'archéologie*, 19, 1997, pp. 95-108; 平岡洋子「メルボルンのヴィクトリア国立美術館蔵《キリストの奇蹟の祭壇画》 - 図像解釈と制作年代 -」『美術史』第一五五冊、二〇〇三年、一〇五～一二四頁。

(30) 肖像のまとう服飾を作品の年代特定に用いるというアプローチも有効であるが、本稿では、個々の写本の年代特定ではなく、イメージの型を形成するためのモティーフとして服飾を扱っている。この点に関しては、ハンノ・ウェイスマン（Hanno Wijsman）氏との議論から多くの示唆を得た。

(31) フィリップ善良公のイメージについては以下を参照。Smeyers, *op.cit.*, pp. 288-325; Pascal Schandel, "Les images de dédicace à la cour des ducs de Bourgogne: Ressources et enjeux d'un genre," dans Bernard Bousmanne & Thierry Delcourt, éds., *Miniatures flamandes, 1404-1482*, Paris/ Bruxelles, 2011, pp. 66-80; 今井、前掲書（二〇一四年）；今井、前掲書（『聖母子への祈り』）、二五九～二七五頁。

(32) "Et le duc bourgongnon...toutesvoies n'estoit vestu encores que de noir, ensemble toute la greigneur part de ses gens." Chastellain, *op.cit.*, I, pp. 187-188. 以下の論考は、フィリップ善良公の黒服の着用を、服飾史の観点から分析している。Sophie Jolivet, "La construction d'une image: Philippe le Bon et le noir (1419-1467)," *Apparence(s)*, 2015. https://apparences.revues.org/1307

(33) この点については以下を参照。Wijsman, *op.cit.*, pp. 196-198.

(34) ブルゴーニュ公の所蔵図書については以下を参照。Georges Doutrepont, *La Littérature française à la cour des ducs de Bourgogne: Philippe le Hardi, Jean sans Peur, Philippe le Bon, Charles le Téméraire*, Genève, 1970[1909]; Georges Doutrepont, *Inventaire de la "librairie" de Philippe le Bon (1420)*, Genève, 1977.

(35) フィリップ善良公のイメージが写本挿絵に登場する場合は、①古代の英雄の歴史や年代記などの世俗本の献呈を受ける姿②写本作者の仕事場を訪問する姿③祈禱者像に大別することができる。マーガレットの場合とは異なり、③の祈禱者像が①②よりも少ない。Smith, *op.cit.*, p. 47.

(36) Smith, *op.cit.*, p. 48.

(37) Smith, *op.cit.*, p. 49.

(38) 《ダンの三連画》については主に以下を参照。K.B. McFarlane, *Hans Memling*, Oxford, 1971, pp. 1-15, 52-57; Jill Dunkerton et al., *Giotto to Dürer: Early Renaissance Painting in the National Gallery*, London, 1991, pp.320-321; Dirk de Vos, *Hans Memling: l'œuvre complet*, Anvers, 1994, pp. 180-183; Lorne Campbell, *National Gallery Catalogues: The Fifteenth Century Netherlandish Paintings*, London, 1998, pp. 374-391; Barbara G. Lane, *Hans Memling: Master Painter in Fifteenth-Century Bruges*, London/ Turnhout, 2009, pp. 282-284.

(39) 年代記作者ド・ラ・マルシュがダンの名を挙げている。「イングランド側には灯りを手にして歩く多数の参加者…ジャン・ダン氏…」"Et du cousté des Angloix avoit beaucop de gens de bien à pied tenans la littiere...maistre Jehan

Don...," H. Beaune Olivier & J. d'Arbaumont, éds., *Mémoires d'Olivier de la Marche: maitre d'hôtel et capitaine des gardes de Charles le Téméraire*, III, Paris, 1885, p. 111.

（40）"For yet not har that ys on of yor treu frendes Margarete of Yorke" ロンドン、大英博物館、MS. Royal 15D IV, fol. 219. Janet Backhouse, "Sir John Donne's Flemish Manuscripts," in Peter Rolfe Monks & Douglas David Roy Owen, eds., *Medieval Codicology, Iconography, Literature, and Translation, Studies for Keith Val Sinclair*, Leiden, 1994, pp. 48-57, in part. p. 48. マーガレットのメッセージの下には、マリ・ド・ブルゴーニュのメッセージも記されている（"[P]renez moy ajames pour v[ost]re bonne amie Marie D. de bourg.ne"「末永くよき友とさせてください。ブルゴーニュ公女マリ」）。そのため、この写本はマリが亡くなる一四八二年までにダンに贈られたと推定される。

（41）ジョン・ダンの生涯については以下を参照。McFarlane, *op.cit.*, pp. 1-16, 56-57; Campbell, *op.cit.*, pp. 381-383.

（42）マーガレットが、一四七二年以降にくントの聖バルバラのギルドの名誉会員をつとめていたことも指摘されている。Blockmans, *op.cit.*, pp. 39, 43.

（43）《受難伝》については以下を参照。De Vos, *op.cit.*, pp. 105-109; Lane, *op.cit.*, pp. 147-155, 315-316; 寺門臨太郎「キリスト受難図に仮託された現世的望郷 - ハンス・メムリンク《受難伝》と注文主トンマーゾ・ポルティナーリ -」『芸術研究報』三三、二〇一二年、一～二二頁。

（44）同じくメトロポリタン美術館に残されるトンマーゾの肖像とともに、三連画の両翼を形成していたと考えられる。この作品については以下を参照。De Vos, *op.cit.*, pp. 100-103; Maryan W. Ainsworth, & Keith Christiansen, eds., *From van Eyck to Bruegel*, exh.cat., New York, 1998, pp. 162-165. この肖像は、《受難伝》と同様に、二人の結婚後まもなく、一五二年を経て制作されたと考えられている。マリアは一六歳で結婚したので、一〇代の姿が表わされていることになる。

（45）Susanne Franke, "Between Status and Spiritual Salvation: The Portinari Triptych and Tommaso Portinari's Concern for His Memoria," *Simiolus*, 33, 2007-08, pp. 123-144. この祭壇画は、一四八三年頃までにはフィレンツェに移送されていた。

【図版出典】

図1・図2・図6・図13・図22　S. Marti et al., eds., *Splendour of the Burgundian Court*, Antwerp, 2009.

図3～図5・図9～図11・図29　D. Eichberger, ed., *Women of Distinction*, Turnhout, 2005.

図7・図8・図23　M. Smeyers, *Flemish Miniatures from the 8th to the mid-16th Century*, Turnhout, 1999.

図12　©IRPA

図14～図16　B. Bernard & T. Delcourt, éds., *Miniatures flamandes*, Paris/ Bruxelles, 2011.

図17　B. Bousmanne, *Item a Guillaume Wyelant aussi enlumineur*, Bruxelles, 1997.

図18　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rogier_van_der_Weyden_(workshop_of)_-_Portrait_of_Isabella_of_Portugal.jpg

図19　E. Morrison & T. Kren, eds., *Flemish Manuscript Painting in Context*, Los Angeles, 2006.

図20・図21　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hans_Memling_-_Donne_Triptych

_-_National_Gallery_London.jpg

図24 L. Campbell, *National Gallery Catalogues*, London, 1998.

図25 C. Weightman, *Margaret of York, Duchess of Burgundy 1446-1503*, New York, 1989.

図26・図27 https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Portinari_Triptych

図28 Exh.cat., *From van Eyck to Bruegel*, New York, 1998.

［付記］

本稿は、ネーデルラント美術研究会（二〇一七年一一月二五日、於関西大学）で発表した内容を改稿したものである。また、本研究は平成二九年度大阪大谷大学特別研究費の助成を受けている。記して謝意を表したい。

〈表：マーガレット・オブ・ヨーク関連写本〉

＊T. Kren, ed., *Margaret of York, Simon Marmion, and the Visions of Tondal*, Malibu, 1992, pp. 257-263. をもとに作成。
＊網掛け部分は筆者による追加。
＊写本は以下のように分類される。

No. 1~8: マーガレット自身が所蔵するために依頼した写本
No. 9~11: マーガレットに贈られた写本
No. 12~23: マーガレット所蔵だが、マーガレットが依頼したとは限らない写本
No. 24~27: マーガレットが贈った写本
No. 28~30: マーガレットと関係するが、マーガレットの依頼・所蔵とも確認できない写本

No	写本	マーガレット・オブ・ヨークの「サイン」	備考
1	ニコラ・フィネ『聖ブノワの慈悲』1468-77年頃、羊皮紙、213葉（挿絵2点）、370×260 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9296.	モットー (fols. 1, 17) 紋章 (fols. 1, 2, 17) CMのイニシャル（各所） 署名 (fol. 213v) 祈禱者像 (fols. 1, 17)	献呈者はニコラ・フィネ。
2	ニコラ・フィネ『ブルゴーニュ公妃とイエス・キリストの対話』1468-77 年頃、羊皮紙、140葉（挿絵1点）、200×140 mm、ロンドン、大英図書館、Add. Ms. 7970.	モットー (fol. 1v) 紋章 (fol. 1v) CMのイニシャル (fol. 1v) 冒頭文字の装飾 (fol. 2) 祈禱者像 (fol. 1v)	献呈者はニコラ・フィネ。
3	ジャン・ジェルソンによる祈りの書、1468-77年頃、羊皮紙、158葉（挿絵3点）、380×270mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9305-06.	CMのイニシャル (fol. 7) 署名 (fol. 158)	
4	『ギー・ド・トゥルノの魂のヴィジョン』1474年、羊皮紙、34葉（挿絵1点）、363×257 mm、マリブ、J・ポール・ゲッティ美術館、Ms. 31.	モットー (fol. 7) CMのイニシャル (fol. 7)	筆記者はダヴィッド・オベール。
5	『トゥヌグダルスの幻視』1474 年、羊皮紙、45葉（挿絵20点）、 363×262 mm、マリブ、J・ポール・ゲッティ美術館、Ms. 30.	モットー（各所） CMのイニシャル（各所）	筆記者はダヴィッド・オベール。No. 4 と同じ写本と推定される。
6	修道士ローランによる祈りの書、1475 年、羊皮紙、256葉（挿絵1点）、380 × 250 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9106.	モットー (fol. 9) 紋章 (fol. 9)	筆記者はダヴィッド・オベール。
7	ボエティウス『哲学の慰め』 1476年、羊皮紙、135葉（挿絵1点）、375×270 mm、イェーナ、大学図書館、Ms. El. f. 85.	モットー (fol. 13v) 紋章 (fol. 13v) (?) 献呈像 (fol. 13v)	筆記者はダヴィッド・オベール。
8	道徳論および宗教論集、1475年、羊皮紙、267葉（挿絵4点）、360 × 280 mm、オックスフォード、ボドリアン図書館、Ms. Douce 365.	紋章（黒の顔料による上塗り） (fol. 1) 紋章 (fol. 155) (?) 祈禱者像 (fol. 115)	筆記者はダヴィッド・オベール。

9	『聖ゴメールの生涯』所蔵先不明。		1475年にリール（Lier）の司教座聖堂参事会員から贈呈された。
10	『聖務日課書』所蔵先不明。		1477年（あるいは以後）にルイーズ・ド・レイから受け取ったと推定される。
11	『フランドル伯の年代記』1477年、羊皮紙、293葉（挿絵20点）、400×290 mm、ホウカム・ホール、レスター卿図書館、Ms. 659.	モットー (fol. 2) 紋章 (fol. 2) 署名 (fol. 293)	マリ・ド・ブルゴーニュがマーガレットのために依頼。
12	ブルネット・ラティーニ『宝典』第1巻、羊皮紙、184葉（挿絵1点）、350×229mm、サン・カンタン市図書館、Ms. 109.	紋章（留め金部分） 署名（最終ページ）	リール（Lille）でジャン・デュ・ケスヌが筆記。
13	『時禱書』1468年以前、羊皮紙、232葉（挿絵34点）、231×158 mm、個人蔵。	紋章 (fols. 34v, 231)	当初は、シャルル突進公とイザベル・ド・ブルボンのために制作された。
14	『時禱書』1488年頃、羊皮紙、161葉（挿絵54点）、180×125 mm、メス市図書館（旧蔵）、Ms. 1255 (Salis 104).	モットー (fol. 10v) 紋章 (fol. 10v)	現存しない。
15	ヤコブス・ファン・グルイトローデ、聖ボナヴェントゥーラ、ジャン・ジェルソン、トマス・ア・ケンピスによる著作、1462年、羊皮紙、8葉・234葉（挿絵10点）、390×280 mm、ヴァランシエンヌ市図書館、Ms. 240.	署名 (fol. 444v)	fol. 211から始まる。 フィリップ善良公のためにダヴィッド・オベールがコピーした。
16	ジャン・マンセル『ローマ史』第4巻、羊皮紙、220葉（挿絵3点）、470×340 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9233.	署名 (fol. 220)	
17	『ローマ巡礼教会の案内書』1470-80年頃、羊皮紙、47葉（挿絵7点）、127×88 mm、ニューヘブン、イエール大学、バイネケ稀少書・写本図書館、Ms. 639.	紋章 (fol. 1)	
18	ジャン・ミエロ『聖カタリナの生涯』1475年頃、羊皮紙、54葉（挿絵14点）、363×258 mm、パリ、国立図書館、NAF28650.	モットー（各所） CMのイニシャル（各所）	No.4・No.5と同じ写本と推定される。
19	『黙示録』と『殉教者聖エドマンドの生涯』1475年頃、羊皮紙、124葉（挿絵79点）、360×260 mm、ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館、M. 484.	紋章 (fol. 10)	筆記者ダヴィッド・オベールに帰属。
20	『聖務日課書』1477年以前、羊皮紙、263葉（挿絵7点）、250×170 mm、ケンブリッチ、セント・ジョンズ・カレッジ、Ms. H. 13.	モットー（各所） CMのイニシャル（各所）	

21	道徳論集、1470年代中頃、羊皮紙、307葉（挿絵5点）、380×270 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9272-76.	紋章 (fol. 9) 祈禱者像 (fol. 182)	
22	道徳聖書（抄録）および祈禱指南書、1475年頃、羊皮紙、269葉（挿絵4点）、370×270 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9030-37.	紋章とモットー（シャルルとマーガレット）(fol. 9)	筆記者ダヴィッド・オベールに帰属。
23	聖務日課書2冊（あるいは2巻からなる1冊の聖務日課書）、所蔵先不明。		1477年にルイーズ・ド・レイから購入。
24	クルティウス・ルフス『アレクサンダー大王の生涯』1470-80年頃、羊皮紙、219葉（挿絵49点）、170×130 mm、ロンドン、大英図書館、Royal Ms. 15 D IV.	署名（マーガレットとマリ）(fol. 219v)	マーガレットとマリがジョン・ダンに贈呈。
25	応答頌歌（断片）、羊皮紙、442×299 mm、ロンドン、大英図書館、Arundel Ms. 71, fol. 9.	紋章 (fol. 9)	装飾写本一ページ分が残る。
26	ユスティヌス『地中海世界史』1465-70年頃、羊皮紙、180葉、260×185 mm、マドリード、エスコリアル図書館、Ms. e. III. 22.	マーガレットの署名 (fol. 96v)	同一テクストが繰り返される。一点目(fols. 1-98)は、マーガレットがマクシミリアン1世に贈呈したものと同定される。
27	ピエール・ド・ヴォー『聖コレットの生涯』1468-77年頃、羊皮紙、166葉（挿絵25点・冒頭文字の装飾6点）、260×180 mm、ヘント、聖クララ修道院、Ms. 8.	モットー (fol. 1) 紋章 (fol. 1) CMのイニシャル (fol. 1 & 各所) 祈禱者像 (fol. 40v) 署名 (fol. 163)	マーガレットがヘントの聖クララ修道院に贈呈。
27a	聖歌楽譜集。		17世紀の史料で、マーガレットがバンシュの聖ユルスメール教会に寄贈したと伝えられる。
28	ヘントの聖アンナギルド（信心会）の名簿、1476年8月15日以降、羊皮紙、挿絵1点、270×200 mm、ウィンザー城、王室図書館。	祈禱者像（マーガレットとマリ）(fol. 2)	名簿にはマーガレットの名も記される (fol. 3)。
29	聖アウグスティヌス、および聖ベルナルドゥスに帰属される著作、サンクト・ペテルスブルク、王室図書館（旧蔵）、Ms. fr. o. v. I. 2.		現存しない。
30	ラウル・ルフェーブル『トロイ史集』所蔵先不明。		ウィリアム・カクストンによる翻訳（1471年9月19日完成）。

図2　《シャルル突進公》ベルリン、国立絵画館

図1　《マーガレット・オブ・ヨーク》パリ、ルーヴル美術館

図3　《7つの慈善行為を行うマーガレット・オブ・ヨーク》1468年以降、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9296, fol. 1.〔→リストNo. 1〕

図4　《マーガレット・オブ・ヨーク》1468年以降、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9296, fol. 17.〔→リストNo. 1〕

図5　図4の部分

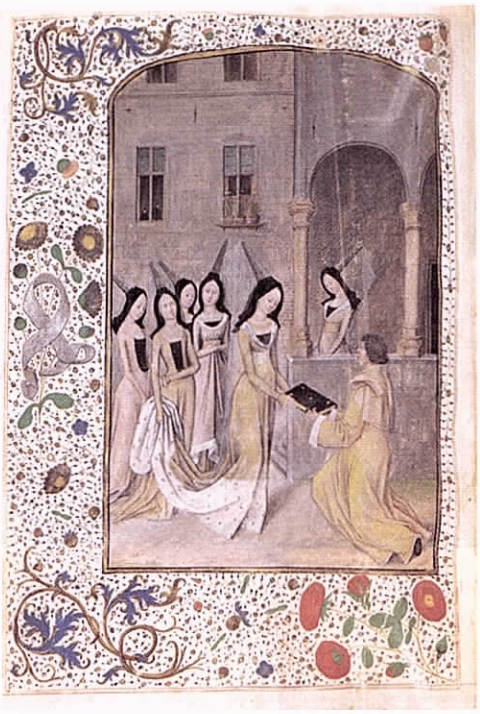

図7　《マーガレット・オブ・ヨークへの献呈》イェーナ、大学図書館、Ms. El. f85, fol. 13v.
〔→リストNo. 7〕

図6　《復活のキリストとマーガレット・オブ・ヨーク》1468年以降、ロンドン、大英図書館、Add. Ms. 7970, fol.1v. 〔→リストNo. 2〕

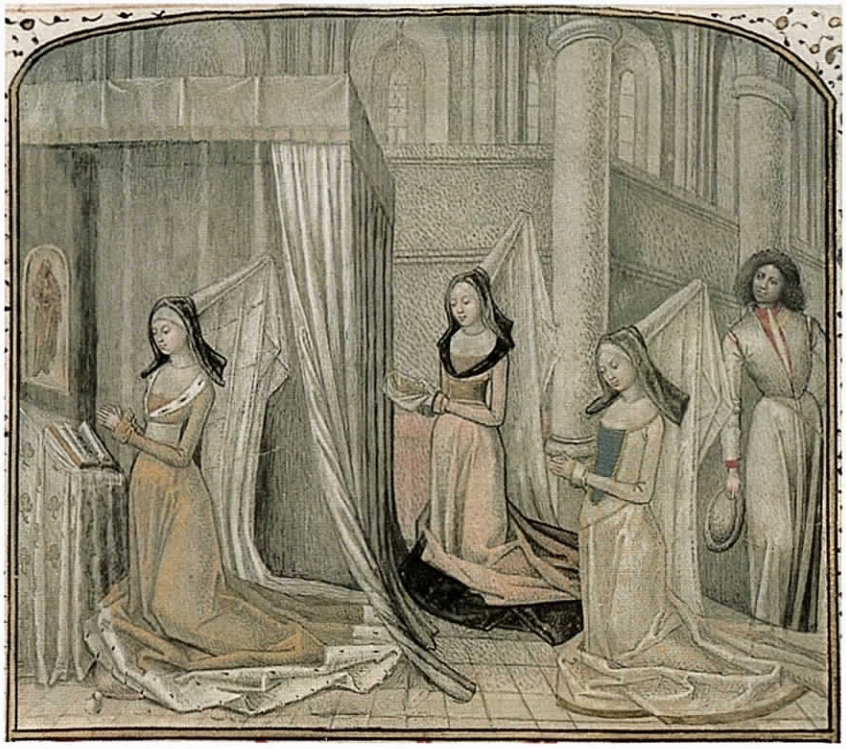

図8　《マーガレット・オブ・ヨークと祈禱者たち》オックスフォード、ボドリアン図書館、Ms. Douce 365, fol. 115.
〔→リストNo. 8〕

図9　《三位一体とマーガレット・オブ・ヨーク》1468年以降、ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9272-76, fol. 182.〔→リストNo. 21〕

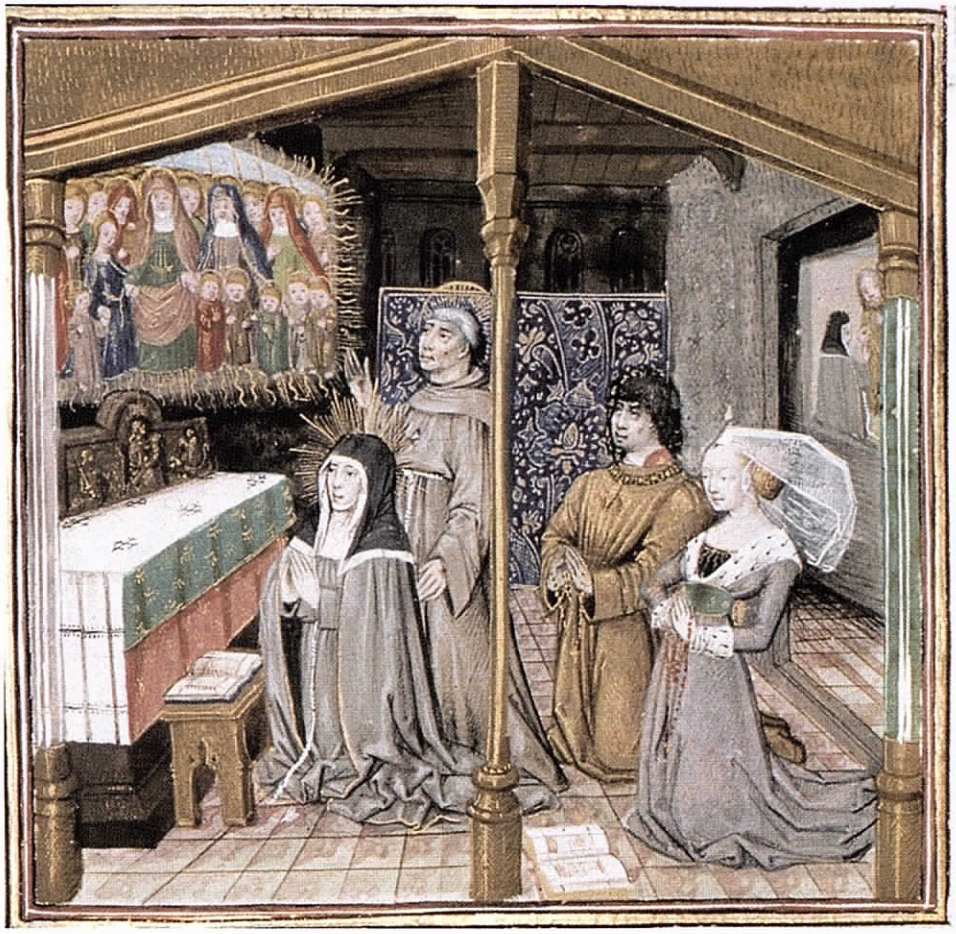

図10　《聖女コレットのヴィジョンとシャルル突進公夫妻》ヘント、聖クララ修道会、Ms. 8, fol. 40v.〔→リストNo. 27〕

図11　《マーガレット・オブ・ヨークとマリ・ド・ブルゴーニュ》ウィンザー、王室図書館、fol. 2.〔→リストNo. 28〕

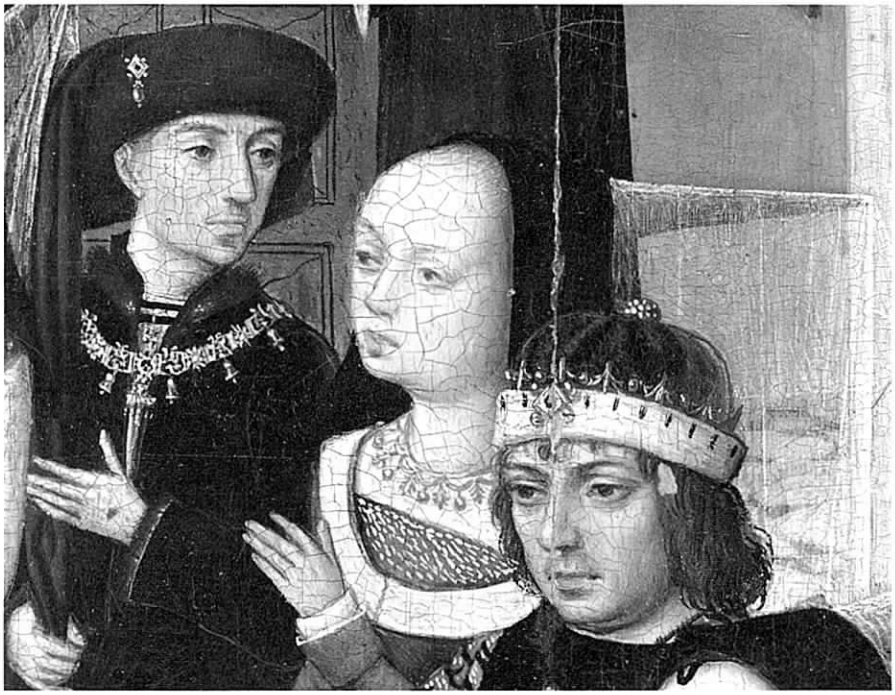

図12　《キリストの奇蹟の祭壇画》（左翼部分）メルボルン、ヴィクトリア国立美術館

図14　『エノー年代記』ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9242, fol.1.

図13　ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（コピー）《フィリップ善良公》ブリュージュ、市立美術館

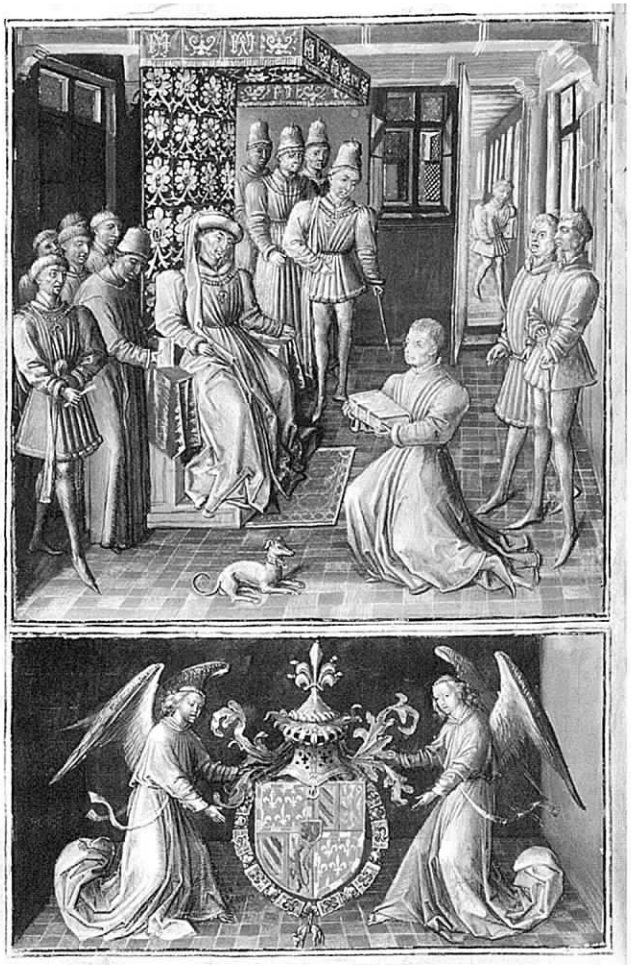

図15　《ダヴィッド・オベールによる献呈》ブリュッセル、王立図書館、Ms. 907, fol. 38v.

図16　《受胎告知とフィリップ善良公》『天使祝詞論』1461年、ブリュッセル、王立図書館、ms. 9270, fol.2v.

図18　《イザベル・ド・ポルテュガル》ロサンゼルス、ポール・ゲッティ美術館

図17　《フィリップ善良公夫妻》ブリュッセル、王立図書館、Ms. 9026, fol. 258r.

図20　ハンス・メムリンク《ダンの三連画》（中央パネル）1480年頃、ロンドン、ナショナル・ギャラリー

図19　《シャルル突進公夫妻》コペンハーゲン、デンマーク王立図書館、Ms. Gl. Kgl. 1612, 4o, fol. 1v.

図23　図 8 の部分

図22　図 6 の部分

図21　図20の部分

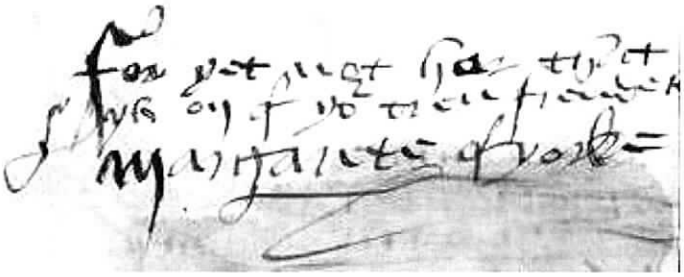

図25　「マーガレット・オブ・ヨークのサイン」『アレクサンダー大王の偉業』ロンドン、大英図書館、MS. Royal 15D IV, fol. 219.

図24　図20の赤外線リフレクトグラム

図26　フーホー・ファン・デル・フース《ポルティナーリの三連画》（右翼部分）、フィレンツェ、ウフィツィ美術館

図29　図９の部分

図28　ハンス・メムリンク《マリア・バロンチェッリ》ニューヨーク、メトロポリタン美術館

図27　図26の部分